

復興の力みなぎる 小名浜港

あの日から二年…。
着実な復興、そして更なる飛躍のステージへ



地域の産業を支える小名浜港

福島県いわき市は、製造品出荷額が東北で第一位の産業都市です。小名浜港は、いわき市の産業を支える物流拠点として重要な役割を担うとともに、年間200万人以上が訪れる観光地、さらに豊かな漁場を持つ水産基地として栄えてきた港です。

震災直後に果たした役割

平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって、小名浜港では全ての係留施設が被災し、ふ頭の沈下や陥没、荷役機械の損傷など甚大な被害を受けました。

このような状況の中、全国の地方整備局などが派遣した職員と協力して、被災状況調査及び航路・泊地障害物調査を開始。航路をふさいでいた車やコンテナなどの漂流物を取り除く作業を行い、震災から5日後には緊急物資受け入れ用岸壁として2バースが利用可能となりました。さらに3月28日には危険物を取り扱うふ頭の緊急復旧工事を完了し、背後地域での燃料不足解消に寄与しました。



障害物撤去作業

震災後の電力不足解消に貢献

原発停止に伴う火力発電所のフル稼働に対応するため、燃料となる石炭を荷揚げする岸壁の応急復旧工事を優先して行いました。平成23年5月に水深14mの岸壁を利用開始。同年6月には震災後初となる石炭を積んだ外航船

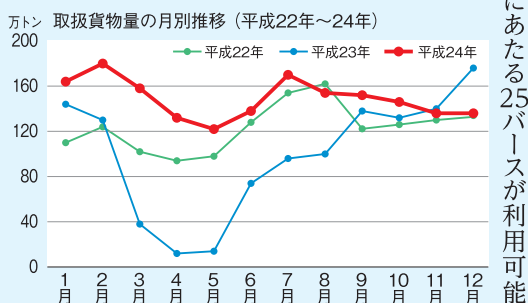
物流機能の回復

震災後、一時的に大きく落ち込んだ取扱貨物量は、岸壁の復旧や背後に立地する企業の再開に伴って急速に回復し、平成24年の実績は震災前の平成22年と比較して約20%増となっています。

小名浜港では現在、公共岸壁（商港区）34バース中、約7割にあたる25バースが利用可能となり、平成25年度末までに全施設の利用を再開させる予定です。復旧工事の実施にあたっては利用者ニーズ把握に努め、港湾機能を維持しながら順次・段階的に整備を行っています。



平成23年6月7日震災後初となる待望の外航船入港



東日本のエネルギー供給拠点として

平成23年5月、国土交通省は安定した石炭需要と発展のポテンシャルを持つ小名浜港を、東日本地域の石炭輸入拠点として「国際バルク戦略港湾」に選定しました。

現在は港湾機能の強化に向け、東港地区国際物流ターミナルにおいて、水深の耐震強化岸壁整備に取り組んでいます。このターミナルが完成すれば、世界最大級の大型貨物船が接岸可能となり、一括大量輸送による調達コストの縮減や調達先の多様化とリスク分散が図られ、小名浜港だけでなく東日本地域への安価で安定した石炭供給が期待されます。

※穀物・鉄鉱石・石炭の3大バルク（ばら積み）貨物を取り扱う拠点として整備を進めていく港。

いわきの復興元年を全国へ発信

小名浜港1・2号ふ頭にあるアクアマリンパークは、環境水族館「アクアマリンふくしま」を中心にレストランや物産センターが立地する親水空間で、毎年200万人以上の観光客が訪れる人気の観光スポットでした。

それぞれの施設は震災により甚大な被害を受けましたが、懸命の復旧作業により再開を果たし、平成24年10月の3連休にアクアマリンパークで行われた復興イベント「いわき小名浜みなとフェスティバル」は、13万5千人の来場者で賑わいました。

震災後、約1年ぶりに運航を再開した観光遊覧船「ふえにつくす（＝不死鳥）」は、その名のとおり、奇跡的に大津波の被害を免れ、小名浜港周辺の観光遊覧やイベントクルーズで活躍しています。



観光遊覧船「ふえにつくす」とアクアマリンパーク